八十木先生の思い出

杉　山　秀　子

（ロシア語）

先生とはじめて正面からお顔をあわせたのは、今から五、六年前私がちょうど組合の委員長をやっていた頃であった。先生はかねてより北海道班で極めて精力的に活動なさっており、本校の執行委員も何度かなさっていらした。当時組合の役員一行は、岩見沢の教養部と苫小牧短大の跡地と現地の不動産屋めぐり、新設の苫小牧大学の視察と大久保学長との面談、北海道班との経験交流など、短時間で日程をこなさなければならなかったが、先生は多忙にもかかわらず、東京からの遠来の客を暖かく迎えてくださり私たちの日程に合わせて、夜の懇親会までわざわざ付き合ってくださった。はじめてお会いした時の先生は美しい白髪に、ふくよかな笑みを浮かべた温厚な紳士という印象であった。いかにもゆとりと教養を兼ね備えた知的な雰囲気を周囲にかもし出されていた。その後東京の大学に移られてからは、先生の御様子が日増しに変わられていくのを眼のあたりにして心がひそかに痛んだ。

御家族を残しての単身赴任、東京の汚い空気、過度に塩素消毒された水、先生を取り巻く外国語部の人間関係からくるストレスなど、どれをとっても健康にはあまりよくないことが多すぎたように思われる。冷涼かつ清澄な空気の中で育った白樺の木が、よどんだ空気の汚れた場所で黄ばみ、萎れていくかのように、先生も徐々にお痩せになり、ひとまわり小さくなられたようであった。

先生の教育に対する真摯な熱意と誠実な態度、曲がったことが大嫌いな真っ直ぐな御性格など、どれをとっても今私の心の中に末長く思い出として残っていくであろう。　合掌。